

# 13 課

3月28日

## ちり 塵から星へ



安息日午後

3月21日

今週のテーマ

### 暗唱聖句

目覚めた人々は大空の光のように輝き／多くの者の救いとなった人々は／とこしえに星と輝く。(ダニエル 12 : 3、新共同訳)

賢い者は、大空の輝きのように輝き、また多くの人を義に導く者は、星のようになって永遠にいたるでしょう。(ダニエル 12 : 3、口語訳)

### 今週の聖句

ダニエル 12 章、ローマ 8 : 34、ルカ 10 : 20、ローマ 8 : 18、ヘブライ 2 : 14、15、ヨハネ 14 : 29、黙示録 11 : 3

ダニエル書は、ネブカドネツアルがユダに侵攻し、捕囚をバビロンへ連れ去ったところから始まり、それとは対照的に、ミカエルが終末時代のバビロンから神の民を救うために立ち上がるところで終わっています。つまり、ダニエル書全体で示されているように、最後に、まさに最後の最後に、神は御自分の民の益となるようにすべてを解決して下さいます。

すでに見たように、ダニエルと彼の友人たちは、捕囚の試練と挑戦のただ中で、神に忠実であり続けるとともに、比類ない知恵を働かせました。同様に、苦難に直面するとき、終末時代の神の民も、とりわけ「国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難」(ダニ 12 : 1) の中で、忠実であり続けます。彼らは、バビロンにおけるダニエルと彼の友人たちのように、知恵を働かせ、理解を示すでしょう。彼らは個人的な美德として知恵を働かせるだけでなく、その知恵の結果として、人々を義に導くために献身します。死ぬ者もいれば、殺される者もあり、従って塵ちりに戻りますが、彼らは永遠へと復活させられるでしょう。「多くの者が地の塵ちりの中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入……る」(ダニ 12 : 2) と聖書が言うとおりで。

問1 ダニエル 12:1 を読んでください。時の終わりに、だれが歴史の流れを変えますか。この聖句の意味を理解するうえで、ローマ 8:34 とヘブライ 7:25 は、いかなる助けとなりますか。

ここまでダニエル書のすべての章は、異教の国の支配者に言及することで始まっていました。同様にダニエル 12 章も支配者から始まりますが、ほかの章とは違い、この支配者は、神の民を敵の手から救うために立たれる聖なる天使長です。

ダニエル 10 章の研究で垣間見たように、ミカエルはチグリス川でダニエルの前にあらわれた力強い天の存在と同じです。そこでは、神の民の天の代表として出現しています。彼はまた、ダニエル書のほかの箇所において、「人の子」（ダニ 7 章）、「万軍の長」（同 8 章）、「油注がれた君」（同 9 章）としてあらわれています。このように、ミカエル（「だれが神のようであろうか」という意味）は、ほかならぬイエス御自身に違いありません。

ミカエルが介入されるタイミングに注目することは重要です。ダニエル 12:1 によれば、その介入は「その時」になされます。この表現は、直前のダニエル 11:40～45 で言及されている時を指しています。それは、1798 年の教皇制の失墜から終わりの時の復活（ダニ 12:2）までの期間です。

ミカエルの働きの二つの重要な側面は、彼の行動を説明するためにダニエル 12:1 で用いられている「立つ」という動詞から推測することができます。第一に、この「立つ」という動詞は、征服し、支配する王たちの台頭を連想させます。またこの動詞は、元来、軍事的な意味を含んでいます。大争闘の最終段階において、ミカエルが神の民を守り導く軍事的指揮官の役割を果たすことを示しているのです。

第二に、「立つ」という動詞は、裁きの場をも指し示しています。ミカエルは、天の法廷で仲裁人としての役割を果たすために立たれるのです。人の子として、彼は調査審判の間に神の民を代表するため、「日の老いたる者」の前に出てください（ダニ 7:9～14）。このように、ミカエルが立つことは、彼の働きの軍事的側面と司法的側面を連想させます。言い換えれば、ミカエルは、神の敵を打ち破る力と、天の法廷で神の民を代表する権威を授けられているということです。

ミカエルが私たちのために（今でも）立ってくださることを知る意味について、考えてください。私たち罪人は、そのことからどのような希望を得られますか。

問2 ダニエル 12：1 は、「あの書に記された人々」について述べています。それはどういう意味ですか。

ミカエルが介入する時は、かつてなかったほどの苦難の時とも称されています。それは、神の“霊”が反逆的な人類から取り去られる時に相当します。その後、七つの最後の災いが、諸国民に対する神の怒りのあらわれとして終末時代のバビロンに注がれ（黙 16 章、18：20～24）、闇の力がこの地上に解き放たれるでしょう。エレン・G・ホワイトは、この時について、「その時サタンは、地の住民を大いなる最後の悩みに投げ入れる。神の天使たちが人間の激情の激しい風を抑えるのをやめると、争いの諸要素がことごとく解き放たれる。全世界は、昔のエルサレムを襲ったものよりもっと恐ろしい破滅に巻き込まれる」（『希望への光』1898 ページ、『各時代の争闘』下巻 386 ページ）と書いています。

しかし、神の民はこの過酷な時期に救われるでしょう。なぜなら、天の法廷における調査審判で、彼らは天の大祭司であられるイエスによって正しさを立証され、彼らの名前がその書に記されているからです。この書の意味を理解するためには、聖書が二種類の天の書について言及していることを心に留めておかねばなりません。一つは、主に属する人たちの名前を収録しており、時として「命の書」と呼ばれています（出 32：32、ルカ 10：20、詩編 69：29、フィリ 4：3、黙 17：8）。

命の書に加えて、聖書は、人間の行為を記録した書についても触れています（詩編 56：9、マラ 3：16、イザ 65：6）。これらの書が、主に対するすべての人の献身を判定するために天の法廷で用いられます。これらは、すべての人間の名前と行為を含む天の記録、「データベース」なのです。天に自分の名前と、とりわけ自分の行為が記されているという考えに、眉をひそめる人もいます。しかし、私たちがひとたびキリストに献身し、私たちの名前が命の書に記されるなら、私たちの悪行は裁きの中で削除されます。この天の記録が、全宇宙に対して裁判上の証拠を提供するのです。それは、私たちがイエスに属しており、それゆえ困難な時期に守られる権利があるという証拠です。

なぜ、私たちのものと認められるキリストの義だけが、「あの書に記され（る）」唯一の希望なのですか。あなたの答えを安息日学校のクラスで発表してください。

**問3** ダニエル 12：2、3 を読んでください。彼はここで、どのような出来事について語っていますか。死について私たちが理解していることを考えると、この出来事はなぜ重要なのですか。

ダニエル書は、たぶん旧約聖書の中で最も明確に来るべき復活に言及しています。そして、この箇所についてじっくり考えるとき、私たちはいくつかの重要な真理を学ぶことができます。第一に、「眠り」という比喩が示すように、不滅の魂は人間の肉体に宿っていません。人間は、体、心、霊が分かちがたく一体となっているものです。死ぬときに人は存在なくなり、復活まで無意識の状態が続きます。第二に、この聖句は、来るべき復活を罪の結果として起こることの逆の現象として指摘しています。実のところ、ダニエル 12：2 で「**地の塵**」と訳されている表現は、原語では「**塵の地**」と読めます。この珍しい語順は、創世記 3：19 を指し示しており、「**塵**」が「**地**」に先行している個所は、聖書の中でほかにここだけなのです。このことは、アダムの墮罪の際に下された死の判決が取り消され、死がもはや支配しないことを示唆しています。「死は勝利にのみ込まれた」（I コリ 15：54）と、パウロが言うとおりで。

**問4** ローマ 8：18 とヘブライ 2：14、15 を読んでください。どのような理由で、私たちは死を恐れる必要がないのですか。

死は地上におけるすべてを破壊し、終わらせます。しかし忠実な信徒にとって、死は最終的決定権を持たないという約束が、私たちには与えられています。死はすでに打ち負かされた敵です。キリストは、死の鎖を断ち切り、墓から復活されて姿をあらわされたとき、致命的打撃を死に与えたのです。今や私たちは、一時的な死の現実の向こうに、私たちがキリストによって神から受け取る命の究極的現実を見ることができます。ミカエルが「立つ」（ダニ 12：1）ので、彼に属する者たちも立ち上がるでしょう。彼らは星のように永遠に輝くために、「**塵の地**」の中から起き上がるのです。

私たちは人生の苦しみ、格闘の中にあって、終末における復活の約束からいかに希望と慰めを得ることができますか。極めて現実的な意味において、それ以外のほとんどのものは、なぜ重要ではないのですか。

問5 ダニエル 12：4、ヨハネ 14：29 を読んでください。なぜダニエル書は終わりの時まで封じられねばならないのですか。

ダニエル書の最後の主要な箇所（ダニ 10：1～12：4）の結論部分で、終わりの時までこの書を封じておきなさいという命令を預言者は受けます。その言葉に続けて天使は、「多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう」（ダニ 12：4、口語訳）と預言します。ダニエル書の研究者の中には、これらの言葉を科学的進歩の予想と受け取った人たちもいますが（そのような意味も含まれるかもしれませんが）、文脈からすると、「あちこちと探り調べ」というのは、ダニエル書を調べることにそのものを指しているようです。確かに、歴史を振り返るとき、何世紀もの間、ダニエル書がわかりにくい文献であり続けたことに私たちは気づきます。一部の地域では、ダニエル書が知られ、研究されていたかもしれませんが、その中心的な教えや預言は不可解なままでした。例えば、天の聖所の清め、裁き、小さな角の正体と働きに関する預言のメッセージは、これらの預言に関する期間とともに、まったく理解できませんでした。

しかし、プロテスタントによる宗教改革以降、ダニエル書を研究し始める人がだんだん多くなりました。とはいうものの、この書が最終的に開かれ、内容がより詳しく明らかになったのは、終わりの時になってからでした。エレン・G・ホワイトが記しているように、「1798 年以来、ダニエル書は封を開かれ、預言の知識は増加し、審判の切迫という厳<sup>げんしやく</sup>粛なメッセージを多くの者が宣言したのである」（『希望への光』1767 ページ、『各時代の<sup>げんしやく</sup>大争闘』下巻 51 ページ）。「18 世紀の終わりから 19 世紀の初めにかけて、ダニエル書と黙示録の預言に対する新たな興味が、地上のさまざまな場所で広く呼び起こされた。これらの預言の研究は、キリストの再臨が間近であるという信仰を広めた。イギリスの多くの解説者、中東のジョゼフ・ウォルフ、南米のマヌエル・ラクンザ、アメリカのウィリアム・ミラーたちは、ほかの多くの預言の研究者たちとともに、ダニエル書の預言に関する彼らの研究に基づいて、再臨は近いと力説した。今日、この確信が世界的な運動の原動力になっているのである」（『SDA 聖書注解』第 4 巻 879 ページ、英文）。

私たちは今日、歴史を振り返り、歴史に関するダニエル書の預言がいかに成就したのを見ることができます。その大きな強みについて考えてみてください。このことは、神のあらゆる約束を信じるうえで、いかなる助けとなりますか。

問6 ダニエル 12:5~13 を読んでください。ダニエル書はどのように終わっていますか。

興味深いことに、この最後の場面は「川」のそばで、つまりダニエルの最後の大きな幻の場所（ダニ 10:4）であるチグリス川で繰り広げられています。しかし、ここで用いられているのは、「川」をあらわすヘブライ語の一般的な言葉ではなく、「イエオール」という通常「ナイル川」を意味する言葉です。このことは私たちに、出エジプトを思い起こさせ、主がイスラエルをエジプトから救われたように、終末時代の御自分の民を救われるであろうことを示しているのです。

預言に関する三つの予定表が与えられています。最初のもの（「一時期、二時期、そして半時期」）は、「これらの驚くべきことはいつまで続くのでしょうか」（ダニ 12:6）という質問に対する答えです。「驚くべきこと」とは、ダニエル 11 章の幻の中に描かれていることを指しており、それはダニエル 7 章と 8 章の詳しい説明です。さらに具体的に言えば、この期間は、ダニエル 7:25 でも、またのちに黙示録 11:3、12:6、14、13:5 でも言及されています。これは教皇に支配権のあった（西暦 538 年から 1798 年に及ぶ）1260 年に一致します。そしてダニエル 11:32~35 は、期間に言及していないものの、同じ迫害を指しているのです。

ほかの二つの期間は 1290 日と 1335 日で、これらは、ダニエルが麻の衣を着た人につけた質問（「これらのことの終わりはどうなるのでしょうか」）への答えです。そしていずれの期間も、「日ごとの供え物」が廃され、「憎むべき荒廃をもたらすもの」が立つときに始まります。私たちはダニエル 8 章の研究（第 9 課）で、「日ごとの供え物」がキリストの継続的な執り成しを指し、それが偽りの礼拝制度に置き換えられたことを学びました。このように、この預言的期間は、フランク王クロビスがカトリック信仰に改宗した西暦 508 年に始まるはずでした。この重要な出来事が教会と国家の結合の道を開き、それが中世を通じてずっと権勢を振るいました。こういうわけで、1290 日は 1798 年に終わりました。この年、フランス皇帝ナポレオンの権威のもとで教皇が捕らえられたのです。また、ダニエル書で言及されている最後の預言期間の 1335 日は、1843 年に終わりました。それはミラライト運動と聖書の預言の研究が更新された時、差し迫ったイエスの到来を待ち望んだ時でした。

ダニエル書を通じて、私たちは二つのものを見ます——迫害される神の民と、最終的に汚名をすすがれ、救われる神の民です。この現実、目の前の試練にもかかわらず、私たちが忠実であり続けるうえで、いかなる助けとなりえますか。

「預言は、審判が始まるまでに相次いで起こる種々の事件を示している。特にダニエル書がそうである。しかし、ダニエルは、最後の時代に関する預言を、『終りの時まで』秘し、封じておくように命じられた。この時が来るまで、これらの預言の成就に基づいて審判に関するメッセージを宣布することはできなかった。しかし、終わりの時に、『多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう』と預言者は言っている（ダニエル 12:4）。

使徒パウロは、彼の時代にキリストが来られると期待しないようにと、教会に警告した。『まず背教のことが起り、不法の者……が現れるにちがいない』と彼は言っている（Ⅱテサロニケ 2:3）。大背教が起こり、『不法の者』の長い支配期間の終わったあとで、初めてわれわれは、主の再臨を期待することができる。『不法の秘密の力』『滅びの子』とも言われている『不法の者』とは、1260年の間、至上権をふるうと預言された法王権のことである。この期間は、1798年に終結した。キリストの再臨は、この時より前には起こり得ないのであった。パウロは、1798年までに及ぶキリスト教時代全体を、彼の警告の中に含ませている。キリスト再臨のメッセージが宣布されるのは、その時以後になるのである」（『希望への光』1766ページ、『各時代の争闘』下巻50ページ）。

### 話し合いのための質問

- ① 未来に起こる終末の諸事件の期日を設定することによって、私たちはどのような危険にさらされますか。予想されたそれらの事件が起こらないとき、多くの人の信仰にどのようなことが起きるでしょうか。ヨハネ 14:29 のキリストの言葉の中には、預言に関するどんな重要な原則がありますか。その原則は、私たちの霊性を高めるために預言を用いるうえで、また偽りの予想を立てたり、信じたりしないうえで、私たちの助けとなるべきものです。
- ② 私たちは現在、瞬時に連絡が取れる時代、（必ずしも私たちのためにならない）驚くほど科学的に進歩した時代に生きています。この時代のどこが、「かつてなかったほどの苦難」が生じるという考えを、想像しやすいものにしているのでしょうか。
- ③ キリストの義という偉大な真理、その福音だけが、なぜ「あの書に記される」唯一の希望なのかという、月曜日の最後の質問に対するあなたの答えについて話し合ってください。その希望なくして、どんな希望を私たちは持つことができるのでしょうか。